

情報やまぐち

山口支社

〒753-0087
山口市米屋町2-1 ウズビル
編集・販売
電話:(083)929-3181
FAX:(083)929-3186
広告・制作
電話:(083)929-3312
FAX:(083)929-3313

JR山口線は今年、新山口（旧小郡）—島根県益田駅間の全線開通100周年を迎えた。同線を利用し、作中に描いた文学者7人を取り上げ、そのゆかりの地にある文学碑や生家、そして今なお彼らの作品を愛する人たちの姿を追った。



新山口駅



小郡駅は1900年に、山陽鉄道の三田尻（現防府）—厚狭駅間の開通により、現在地に開業。06年に国有化され、13年に小郡—山口駅間に国鉄山口線が開通。75年には新幹線が開業、2003年に新山口駅に改称した。新幹線が停車し、各在来線との接続や山口宇部空港への路線バスが運行する交通の要地となっている。22年度の1日の乗降者は1万2904人。

「ガソリンカー」で飲みに通う姿



種田山頭火(小郡文化資料館提供)

小郡に其中庵句友らと交流

建物前にはゆかりのある俳人、種田山頭火（1882〜1940年）の像があり、山頭火の詠んだ句が記された柱がある。山頭火は酒に親しみ漂泊の俳人として知られた。19

32〜38年ごろ小郡に其中庵を構え、友人の国森樹明や伊東敬治の助けを受けて、小郡駅から訪れた多くの句友と交流したという。同駅からしばしば温泉の入浴や酒を飲み湯田を訪れた。同時期に登場したガソリンで走る鉄道車両「ガソリンカー」に乗り、何度

も通う姿が日記からうかがえる。

34年7月26日の日記には「汽車がバスより高いとは（上郷から湯田まで、汽車賃十三銭、バスは十銭、このバスは安くて心地のよい道である、今日は満員つきで、とても乗れない）。ガソリンカーの快さよ、逢ひにゆくにも飲みにゆくにも！」とあり、「けふは飲めるガソリンカーで行く」と句を詠んでいる。

駅弁「山頭火弁当」

駅弁好きで、門司に勤務していた友人の俳人、近木黎々火（ちかき・れいれいか）が1個80銭の駅弁を持つてくるのを楽しみにしていたという。山頭火にちなんだ駅弁「山頭火弁当」は新山口駅で販売されていた。手掛けたのは旧小郡駅弁当。句友で

もあつた友沢聖志が社長を務めていた。

小郡文化資料館には山頭火の常設展示があり、全国からファンが訪れる。同館の学芸員を務めた魚谷なつみさん（30）＝現岡山・津山洋学資料館＝は「母親の自殺というトラウマがあるが、小郡時代の山頭火は友人に囲まれて明るい。普通の人間らしさがとても魅力的」と語った。（古谷）



山頭火弁当のパッケージを持つ魚谷さん（小郡文化資料館で）

情報やまぐち

山口支社

〒753-0087
山口市米屋町2-1 ウズビル
編集・販売
電話:(083)929-3181
FAX:(083)929-3186
広告・制作
電話:(083)929-3312
FAX:(083)929-3313

湯田温泉駅



汽笛がこだまする古里

山口線を思わせる「夏の日の歌」

湯田駅は国鉄山口線の小郡―山口駅間が開通した1913年に設置。61年に湯田温泉駅に改称し、2011年に駐輪場が拡張され足湯もできた。湯田温泉で狐(きつね)が傷を治した伝説から白狐のオブジェが駅前にある。1日の乗降者数は2216人(22年度)。

中原中也(1907〜37年)は現在の湯田温泉出身の詩人。その生家跡は現在、中也作品を紹介する企画展などを行う中原中也記念館(中原豊館長)となっている。中庭には山口線の枕木をイメージした木材が使われている。

生後、中国の旅順や

広島を経て14年、中也が7歳のころから湯田に落ち着いた。上京や帰郷に合わせて、山口線に乗った他、友人を山口観光で長門峡へ案内した時などにも利用した。

汽笛の描写が多い中也の詩の中で一番山口線の姿を感じられる「夏の日の歌」では「上手に子どもを育てゆく、母親に似て汽車の汽笛は鳴る。山の近くを走る時。」と書かれている。盆地に囲まれた山口線を走る汽車を思わせ、山に汽笛がこだまする独特な響きを連想させる。「山に包まれている



中原中也
(中原中也記念館提供)



中原中也記念館

ところ子を育つような母性的なものがあがり、汽笛の音が母親と重ねられているのではないかと中原館長(65)は解釈する。

文明批判と汽車への愛着

文明批判をテーマとした詩「嘗てはフムプを、とぼしてゐたものなんです」では汽車への愛着が読み取れる。「汽車が早いのはよろしい、許す」とある一方、「其の他はもつ、我

慢がならぬ。(中略)エイツ、うるさいではないか電車自動車と」である。中原館長は「都会で近くを歩きかう電車と自動車に対し、遠くとながる汽車に中也は詩情を感じていたのではないかと考える。

「山口線は中也にとって古里につながる道だったことは間違いない。生家から汽笛が今より大きくこだまする音を耳にしていたらう」と中也に思いを巡らせた。(古谷)

情報やまぐち

山口支社

〒753-0087
山口市米屋町2-1 ウッスビル
編集・販売
電話:(083)929-3181
FAX:(083)929-3186
広告・制作
電話:(083)929-3312
FAX:(083)929-3313



山口駅



SLと青春の思い出描く

列車内での出会いや交流も

山口駅は1913年に国鉄山口線の開業により現在地に設立。全列車が停車する拠点駅で、県庁や市役所に加え、県立美術館、瑠璃光寺、サビエル記念聖堂など名所、名跡への最寄り駅となる。駅前には市の伝統的工芸品大内塗の人情が飾られている。1日の乗降者数は2928人(2022年度)。

95歳、現役作家続ける

交通の中心となる同駅にまつわる作家は数多いが、現役作家としては代表作「外郎(ういろう)の家」などで知られる中原中也記念館の名誉館長、福田百合子さん(95)だろつ。



福田百合子さん

山口市宮島町に出生。県立大の前身である山口女子専門学校に通い、同じく前身の山口女子大で教授を務め、同駅から宮野駅まで山口線を利用した。「車内では恩師の太田静一が創刊した『文芸山口』の寄稿者との出会いがあった」と思い出を語る。県庁に通っていた阿東の詩人、大佛文乃(おさらぎ・ふみの)と顔を合わせることもあった。互いに無口で多くの言葉を交わさなかったが、作品の進

展状況を共有することもあった。福田さんが列車に乗る姿がある俳人が「柿若葉言葉少なき人」と句を詠んでくれたこともある。



県立山口博物館前に置かれたSL

たこともある。

戦中は徴用された湯田の飛行機工場に向かうの同駅を利用した。当時からとても貴重だったシュークリームを持って、友人らと山口線で長門峡に連れ立ったことは一番の思い出と振り返る。エッセー集「続心のふるさと散歩」に収められた「蒸気機関車」では蒸気機関車(SL)への愛を語り、踏切で恋人とSLが通過するのを見守った。

描いていた青春の思い出を描いている。県立山口博物館前に置かれたSLは1927年製造で、若いころ恋人と手をつないで見たのはこのSLかもしれないと振り返っている。80年以上にわたり、山口線の車内から変わりゆく山口の風景を眺めてきた。「山口盆地や榎野川といった自然の風景は変わらない。いつもどこか懐かしさを感じる」と話した。(古谷)

情報やまぐち

山口支社

〒753-0087
山口市米屋町2-1 ウズビル
編集・販売
電話:(083)929-3181
FAX:(083)929-3186
広告・制作
電話:(083)929-3312
FAX:(083)929-3313

JR仁保駅



自虐的でうそがない作風

愛読者たちが毎月「礒多を読む会」

仁保駅は1917年に国鉄山口―篠目駅間の延伸により開業。山口駅方面の3・5キロ手前から連続する急勾配の途中にある駅で、仁保地域の中心街から2キロ離れた仁保地峠にあり、すべての普通列車が停車する。

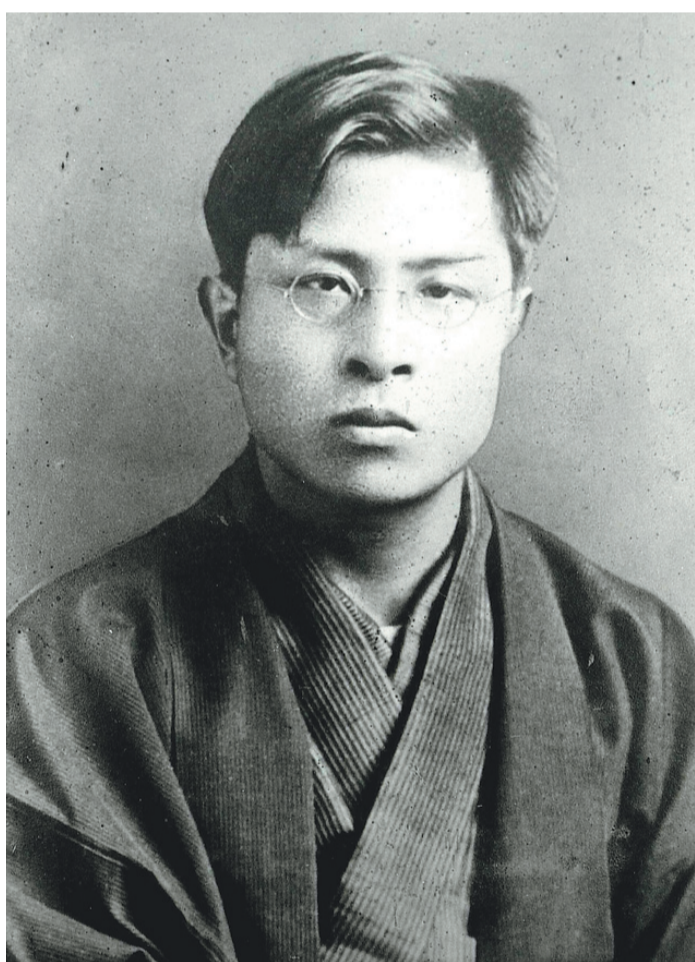
小説「父の家」に駅の描写

現在、駅は無人で、駅舎も無い。蒸気機関車(SL)のやまぐち号が停車する際、4・5キロ先まで続く急勾配区間の運転に向けた準備を行う様子が見学でき、乗客の人気を集めている。1日の乗降者数は64人(2022年度)。

の駅や市内を走る列車はあまり登場しないが、8年ぶりの帰郷を題材にした「父の家」の冒頭には、仁保駅から仁保上郷の生家へ雨の中を歩く姿が描かれている。

「二十七時間汽車に揺られ、元旦の夜の十一時、とうとう勉は八年ぶりで古里の村の駅に着いた。

家は嘉村礒多(1897〜1933年)。自身の生涯をモデルとした小説「業苦」や「途上」で知時、プラットフォームに挟まれたレールがしとしと雨に湿っているのを知



嘉村礒多 (市提供)



礒多の91回忌に合わせて開かれた今年の朗読会(帰郷庵で)

多の命日に合わせて朗読会を開いている。

中西代表は礒多の作品を読みやすく新字体にし、読み仮名を振った作品選集「私小説の極北的な」を出版。昨年11月には会員がお気に入りのは随筆を選んだ選集を刊行した。

中西代表は「自虐的でうそがない作風の礒多は信じられる」とその魅力を語った。(古谷)

情報やまぐち

山口支社

〒753-0087
山口市米屋町2-1 ウズビル
編集・販売
電話:(083)929-3181
FAX:(083)929-3186
広告・制作
電話:(083)929-3312
FAX:(083)929-3313



JR篠目駅



少年が見た開通工事

「花の木鉄道」文明の到来、素朴な目線で

篠目駅は1917年に延伸された国鉄山口線の当時の終着駅として開通。蒸気機関車(SL)用に設置されたれんが造りの給水塔が残され、SLファンの中でフォトスポットになっている。2004年に松本清張原作のドラマ「砂の器」のロケ地となり、話題になった。1日の乗降者数は8人(22年度)。

阿東で生涯、生家は交流館に

同駅ゆかりの作家は氏原大作(1905〜56年)。本名は原草(はら・とさ)。阿東篠目(はら・とさ)に出生し、小説「幼き者の旗」など戦争体験を反映した児童文学を発表。生涯を阿東で過ごし、教育者と

明の到来を村の少年たちの素朴な目線で捉えている。「その素朴な愛情と真実をつつたえたいため、十余年という長い間、ほかの一つおぼえのごとく、この作品を抱いていた」とあとがきにはある。

しても地域に貢献した。通勤の際、同駅を利用して。小学校時代に経験した山口線の開通工事を「花の木鉄道」(54年)に描いた。鉄道という文

阿東篠目にある生家は2021年に氏原大作平成顕彰会(伊藤繁樹会長)によって氏原大作交流館として利用が始まった。

解体を検討していたとこ



氏原大作交流館と伊藤会長(阿東篠目で)

ろ、伊藤会長(71)が阿東の文学者の思い出を残り、氏原作品の読み聞かせをしたいと借り受けた。行っている。7月には山館内には氏原に加え、口線全線開通100周年阿東ゆかりの大佛文乃に合わせ、同駅で氏原(おさらぎ・ふみの)と品を朗読するイベントをス波四郎(しば・しろう)開催し、70人以上が集まった。

教え子で1964年の東京五輪で音楽指揮した片山正見のパネルもある。描かず善人だけを描いた点の魅力」と語った。氏原やス波の貴重な初版

(古谷)



氏原大作 (氏原大作交流館提供)

情報やまぐち

山口支社

〒753-0087
山口市米屋町2-1 ウッスビル
編集・販売
電話:(083)929-3181
FAX:(083)929-3186
広告・制作
電話:(083)929-3312
FAX:(083)929-3313

JR地福駅



地元の自然や伝承から詩作

生家跡に代表作「おせん淵」の詩碑

地福駅は国鉄山口線の山口―徳佐駅間の延伸で1918年に設立。84年から無人駅となった。津和野行きの蒸気機関車（SL）やまぐち号が普通列車との行き違いで停車している14分間は、鉄道ファンの撮影時間となっている。1日の利用者は20人（2022年度）。

汽車に揺られ、県庁に通勤

同駅ゆかりの詩人は大仏文乃（おさらぎ・ふみ）の、1938〜95年）。山口市飯田町に生まれ、幼少時に母の古里である阿東地福的場に移住した。山口高、山口中央高を経て県庁に勤務しながら、古里を主題とした「おせ

ん淵」など6冊の詩集を出版した。県庁勤務の際、的場の自宅から地福駅までの約3キロの道を歩き、山口駅まで山口線を利用した。「私にとって詩とは、自

宅と職場との通勤時間のことでした。山と田の間を歩き汽車に乗り、往復四時間の道のり……と第1詩集「紅皿」のあとがきに記している。

幼なじみで通学と通勤を共にした歌人の山本寛嗣さん（82）は「阿東地福は自動車や自転車に乗ろうとしなかった。人見知りの性格で内気な人だった。列車の中でいつも本を読んでいた。あの静かなたたずまいのどこにあれほどの創作意欲があったのか」と語る。



大佛文乃
(氏原大作交流館提供)



「おせん淵」の詩碑（阿東地福で）

代表詩「おせん淵」のり、川に身投げしたとい詩碑はかつての生家跡にう伝承に基づく。橋のたある。97年に山本さんや中原中也記念館の福田百合子名誉館長、作家の和田健によって建てられた。碑文は大佛の詩集に絵を描いた日本画家、鈴木靖将が記した。同作のモデルの場所は生家近くの長谷川に架かる橋の下。川にいるかっぱが牛を引きずり込んで食べ、責任を問われたおせんは頭がおかしくな

もたにはおせんの供養塔もある。大佛の作風について山本さんは「山口県で有名な女流詩人といえば、金子みすゞがいるが、大佛の詩はもっと大人な作風。長谷川周辺の自然と伝承に題材を取り、どこかおどろおどろしいところがある」と話した。

（古谷）
おわり